

lab.4 Space Syntax

2019年10月12日(土)～
2020年3月22日(日)

開かれた実験室としての〈lab.〉

その第4弾は、都市や景観デザインの新たな手法として注目を集める
〈Space Syntax〉理論によって、空間レイアウトと私たちの行動との関係を探ります。

展覧会名	lab.4 Space Syntax
会期	2019年10月12日(土)～2020年3月22日(日)
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで)
休場日	月曜日(ただし10月14日、10月28日、11月4日、2月24日は開場)、10月15日(火)、 11月5日(火)、12月20日(金)～2020年2月3日(月)、2月25日(火)
会場	金沢21世紀美術館 デザインギャラリー
料金	無料
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]

本資料に関するお問合せ

金沢21世紀美術館
事業担当: 中田耕市 広報担当: 石川聡子、落合博晃
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会について

私たちは「空間」の中に生きています。さまざまな方法で私たちは空間を認知し、一方で空間が変われば私たちの行動も変わります。つまり空間のレイアウトと人間の行動とは深く関係していると言えます。その関係を解き明かす鍵は一体どこにあるのでしょうか。lab.シリーズの第4回となる本展では、「つながり」や「関係性」という視点から分析や調査を進め、この鍵の在りかを探ります。

そのキーワードとなるのが〈Space Syntax〉です。Space（空間）と、Syntax（言語学における統語論＝語と語の関係をもとに意味を導く仕組み）を組み合わせたこの言葉は、1970年代にロンドン大学バートレット校（建築学・都市計画学）のビル・ヒリアー教授が提唱した理論名であり、またその実践に取り組む法人の商標でもあります。空間レイアウトの分析に科学的なアプローチを採り入れ、人間の認知や行動との関係を考察する〈Space Syntax〉の理論と実践は、近年、都市・建築空間デザインの新たな手法として注目されています。

本展は、こうした〈Space Syntax〉の理論と実践を紹介しつつ、会期中を通して金沢21世紀美術館の館内で二つの調査・分析を展開していきます。一つ目は室内行動調査です。機械学習など新しいテクノロジーを用いた映像解析手法を導入し、館内の通路を行き交う人がどのような動線をたどるのか、いつどこで立ち止まり座るのかを観察し、空間レイアウトと人間の認知・行動との関係を分析します。二つ目は当館の展覧会ゾーンを調査の対象とし、来場者の動線調査を行います。この美術館が持つ空間レイアウトの特性を分析し、そのポテンシャルを掘り起こすことで、金沢21世紀美術館の新しい可能性を探ります。

こうした調査活動は、lab.1 OTON GLASSやlab.2 Sightでも活躍したリサーチサポーターの協力を得て進められ、本展の会場となるデザインギャラリーに集積・更新されていきます。ガラスで覆われた透明のlab.に、空間レイアウトと人間行動との関係を解き明かす鍵が見つかるかもしれません。

シリーズ〈lab.〉 について

2017年よりデザインギャラリーで始まった展覧会シリーズ〈lab.〉。実験室や研究室を意味する「laboratory」の略です。会場となるデザインギャラリーを作品展示の場所として用いるだけでなく、調査・研究・実験の場として開きつつ、そのプロセスをプレゼンテーションします。

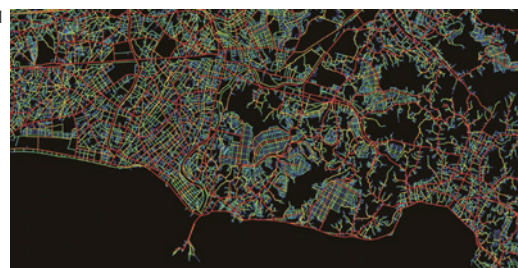
展示構成

1. イントロダクション:空間のつながりを可視化する

会場となるデザインギャラリーの空間を〈Space Syntax〉の手法で分析し、床面全体にヒートマップを描き出します。部屋の中で立ち位置を変えることによって視覚的・動線的な環境が変化することを、直感的に理解できるように示します。

2. 〈Space Syntax〉の理論と実践

トラファルガー広場（ロンドン）の再生計画など、〈Space Syntax〉がこれまでに手がけた実践事例とともにその理論を解説し、〈Space Syntax〉がどのように空間レイアウトという見えない力を測ろうとしてきたのかを紹介します。



Space Syntax 指標による都市構造分析

3. 空間レイアウトと人間の認知・行動との関係を観察する

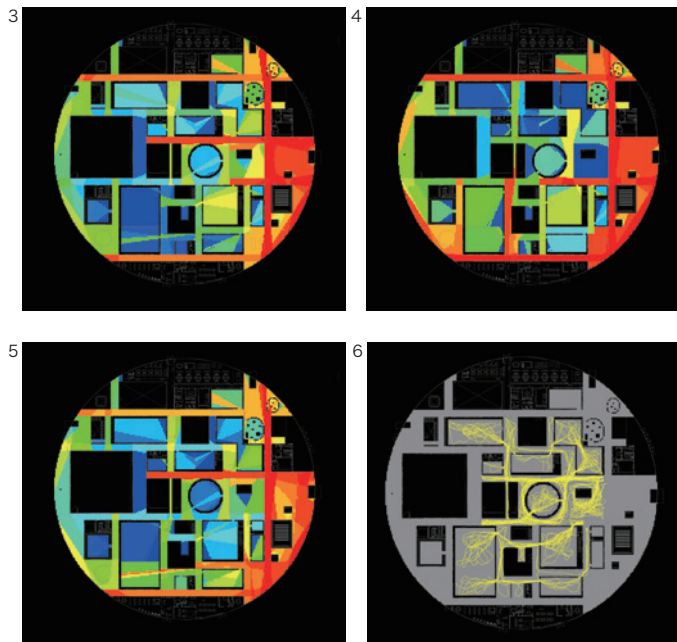
館内の一部の通路を対象として、ツールを配置し、行き交う来館者の動線を調査します。どこで立ち止まり、どこで座るのか、また、個々に休むのか、グループで会話をするのかといった行動を、映像解析技術を用いて分析し、解析結果を逐次、会場に表示します。



駅前広場における歩行者の軌跡調査イメージ

4. 金沢21世紀美術館の空間特性を分析する

空間の開放性や行動の多様性が企図された空間での空間認知と行動について、出入口の変更など異なる条件を設定して分析します。当館の改修工事による休館期間に、リサーチサポーターとともに展示ゾーンの動線を調査します。結果は展示再開（2月4日）後に会場で公開予定。



3～5. Space Syntaxの空間指標による、金沢21世紀美術館のレイアウト分析図

6. 金沢21世紀美術館のレイアウト分析/動線調査イメージ

スペース
シンタックス・
ジャパンについて

1970年代にロンドン大学バートレット校（建築学・都市計画学）のビル・ヒリアー（Bill Hillier）教授が提唱した理論をもとに、1989年にロンドンにてSpace Syntax Limitedが設立される。代表の高松誠治は、2001年にロンドン大学スペースシンタックス研究室において修士号を取得し、2002年から2006年まで、Space Syntax Limitedのプロジェクト・コンサルタント（後に、アソシエイト）として勤務。2004年に受託した日本国内での大規模商業施設再生のプロジェクトを端緒に、2006年、景観、交通工学、建築の専門家らの協力のもとで、アジア初のSpace Syntax Limitedのアフィリエイト・オフィスとしてスペースシンタックス・ジャパンを設立。以来、大規模商業施設のレイアウトデザインのほか、中心市街地や駅前広場空間の再生・整備事業の調査・分析や評価・コンサルティングを行っている。

スペースシンタックス・ジャパンウェブサイト <http://www.spacesyntax-japan.com/>

高松誠治 TAKAMATSU Seiji

スペースシンタックス・ジャパン代表取締役

徳島県生まれ。徳島大学工学部卒業、東京大学大学院社会基盤工学専攻修士課程を修了した後、ロンドン大学大学院(The Bartlett, UCL)において先進建築学（スペースシンタックス研究室）修士課程を修了。2002年から06年までSpace Syntax Limited（ロンドン）に勤務し、2006年、スペースシンタックス・ジャパンを設立。首都大学東京や東京大学大学院で非常勤講師を務める。



広報用画像

画像1～7を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。画像お申し込みフォーム ▶ https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイヴのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。

以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。